



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3784 号 2017.7.21 発行

障害者雇用どう促進 県内支援組織 職場定着へ議論 中日新聞 2017年7月21日 石川



障害者の雇用状況や就職支援の取り組みを発表する県商工労働部の安田秀樹次長＝県庁で

県障害者雇用推進連絡会議が二十日、県庁であり、二〇一八年四月から障害者の雇用率が引き上げられることを受けて、県内の就労支援機関などが取り組みを確認した。特に、精神、発達障害の求職者が増えており、職場の定着や個人に合った職業への紹介など対策が求められた。

石川労働局によると、一六年度の障害者の雇用率は1・88%で、四年連続の増加。就職件数は前年度比五十二件増の千二百六十七件だった。障害者の求職者はこの十年で倍となっており、特に精神障害者は約五倍と大幅に増加している。

石川障害者職業センターなどが取り組みを説明。職を求めてセンターに相談に来る障害者の中には、就職活動がうまくいかなかったり、就職後も職場で仕事ができないと悩んだりした際に受診した医療機関で発達障害と診断されたケースも多い。県内の支援機関の担当者からは「教育の中で発達障害の支援を受けてこなかった人に対応した取り組みが必要になってくる」との指摘もあった。就職が決まっても長続きしない障害者も多く、支援団体から「その人の得意分野や苦手なことをしっかり把握していく丁寧な関わりをお願いしたい」など取り組みの充実を求める声もあった。

障害者雇用促進法は、民間企業や自治体などに一定の割合（法定雇用率）で障害者を雇うよう義務付けている。現在は身体、知的障害者が対象で従業員五十人以上の民間企業の法定雇用率は2・0%。一八年度からは精神障害者も加わるため、厚生労働省は同年度までに法定雇用率を2・2%まで引き上げる方針を決めている。（蓮野亜耶）

都作製「ヘルプマーク」が全国共通に 気付きにくい障害に配慮を

東京新聞 2017年7月21日

外見からは障害があると分かりにくい人が周囲に援助を求めやすいよう東京都が作ったヘルプマークが二十日、日本工業規格（JIS）に追加された。これにより全国共通のマークとなり、見た目では判断できない障害にも気配りする意識の広がりが期待される。

ヘルプマークは、義足利用者や内臓の機能障害がある人などが必要な助けを得られるよう、二〇一二年に都が作製。マークをかたどった赤い樹脂製のひも付きタグを作り、これま



で都内で約十七万個を無料配布した。

都によると、取り組みは他の自治体にも広がり、現在、神奈川や大阪など八府県が導入している。

二〇年東京五輪・パラリンピックで、都は同一都市で初めてパラリンピックを二回開く都市となる。都の担当者は「助け合いのマークとして全国に浸透することで、障害のあることが特別ではないという考えが広がってほしい」と話した。

背景にある差別考えて 相模原殺傷事件26日で1年 大分合同新聞 2017年7月21日

シンポジウムに向けて関連書籍を読む宮西君代さん。「私たちも生きている。感情を持った同じ人間として向き合ってほしい」と訴える＝大分市賀来

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が殺害された事件から、26日で1年になる。元施設職員の男による凶行に全国が震えた。県内の障害のある人たちは「単に精神を病んだ男の事件として片付けず、背景にある障害者への差別や人権問題を考えてほしい」と願う。29日に大分市内でシンポジウムを開き、誰もが安全に生活できる社会の実現について意見を交わす。



シンポジウムは障害のある人や支援者らでつくる「だれもが安心して暮らせる大分県をつくる会」などが主催。同会の3人が事件をどう受け止めたのかを発表する。施設職員らと交えたディスカッションもある。

登壇する予定の宮西君代さん(54)＝大分市賀来＝は脳性まひのため手足の自由が利かず、車椅子生活を送る。「社会の役に立たないと、軽く扱われる体験を何度も繰り返した」と振り返る。男は「障害者は生きていても仕方ない」と述べたとされ、宮西さんは「この人だけが特別だとは思えない」と指摘する。

当日は、これまで感じてきた社会の壁などを伝える。「障害のある人とどう接すればいいのか分からず、『いないほうが良い』と短絡的に考える人もいるだろう。私たちも生きている。感情を持った同じ人間として向き合ってほしい」と訴える。

シンポジウムは、午後1時半から大分市のホルトホール大分で。誰でも無料で参加できる。

問い合わせは、在宅障害者支援ネットワーク(TEL097・513・2313)へ。

障害者一人一人を見て インターネット放送局で番組制作 東京新聞 2017年7月21日

番組に込めた思いを話す梅原義教さん＝大阪府東大阪市で



相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者らが刃物で刺され、十九人が死亡、二十七人が重軽傷を負った事件から二十六日で一年。大阪府東大阪市の拠点とするインターネット放送局「パンジーメディア」は知的障害者が放送に携わり、事件をたびたび取り上げてきた。番組制作の責任者で、生まれつきの脳性まひで障害がある梅原義教(よしのり)さん(42)に、番組づくりや事件から一年がたつ社会への思いを聞いた。

(諏訪慧)

パンジーメディア 知的障害者のグループホームなどを運営する社会福祉法人「創思苑」(大阪府東大阪市)が主体となり、インターネットで動画を配信している。

法人の職員と障害者が中心となり、2016年9月に放送開始。原則、毎月第3金曜日に番組を更新している。

パンジーメディアを設立したのは、障害のある人のことをもっと知ってほしいからです。

昨年二月から企画を練るなど準備を始め、同九月に放送を開始。ですから、津久井やまゆり園の事件が起きたのは放送開始直前の準備の真っ最中でした。最初は、入所者が次々に元職員に殺されたという事態が理解できませんでした。「そんなことが起こり得るのか」と。次第に「僕たちをもっと知ってもらわないといけない」という思いが一層強くなりました。

障害者排除を正当化する犯人の主張は、役に立つ人ほど価値があるという考えが基本。ただ、それは決して犯人だけの考えではなく、世の中に漂っているものだと感じます。

最初の放送は、予定を変えて冒頭で事件を取り上げました。「同じ人間なのに殺されるなんて嫌だ」「好きで障害者として生まれたわけではない」など、事件についての障害者の声を紹介しました。

私は生まれつきの脳性まひで、手足が不自由で移動には電動車いすが欠かせません。地元の特別支援学校を卒業してしばらくは自宅から障害者施設に通っていましたが、二十四歳のときに実家を出てグループホームで暮らし始めました。自分で自由に出掛け、買い物などをしたかったです。

放送は一回五十分ほどで、障害者をめぐる「ニュース」、暮らしぶりをまじえて半生を振り返る「私の歴史」など四本立て。毎月一回、更新しています。

「私の歴史」には、脳の病気の後遺症で言葉を話せない男性が出演したことがあります。本人が原稿を書き、ナレーターが読み上げました。話せなくても映像なら、どんな暮らしをしているのか分かりやすく届けられます。

この一年余りの間に、やまゆり園の事件のほか、障害者差別解消法の施行もありました。先月は、車いす利用者が飛行機への搭乗を拒否されたなど、多くの人が障害のある人について考えるきっかけとなる出来事があったと思います。

でも、それで世の中の風潮が変わったと感じられることはありません。依然として一人一人を見ることなく、「障害者」とひとくくりにしてイメージだけで捉える雰囲気があるように思います。「何を考えているのか分からない」「怖い」などと。たしかにまったく言葉が出せない人や、何を言っているのか聞き取りにくい人もいます。おそらく私も、介助者らが通訳してくれないと、初対面の人は話すことが理解しにくいかもしれません。

障害が重い人でも、表情や行動などで意思は表現しています。でもやり方はそれぞれだから、分かってもらいにくい。だからこそ一人一人の顔や声、暮らしぶりを届けたい。もちろん一回見ただけで、理解してもらえとは思いません。だからこれからも積み重ねていきます。

障害者施設殺害 「匿名報道」めぐる葛藤

FNN ニュース 2017年7月21日

神奈川・相模原市の障害者施設で19人が死亡した事件から、来週で1年。あの事件で被害に遭った入居者の家族に話を聞きました。

大きな議論になった匿名報道。

当事者は、どう受け止めているのでしょうか。

2016年7月26日午前2時ごろ。

神奈川・相模原市にある「津久井やまゆり園」に、刃物を持った植松 聖被告(27)が施設内に侵入。

入所者43人、職員3人が刺されるなど、19人が死亡し、27人が負傷した。

津久井やまゆり園の入倉 かおる園長は「あの日から、全てが変わってしまったなと思っています。多くの命が失われてしまったこと、たくさんの方が、けがをしてしまったことと、それに合わせて、そのほかの方も暮らしの場を追われて、生活の場が一変してしまった」

と語った。

いまだに日常を取り戻せていない現状があった。

あれから1年、われわれは、どうしても事件の関係者に聞いてみたいことがあった。

匿名報道。

本来、殺人事件の被害者は通常、実名で警察から発表されるが、この事件では、警察の判断で被害者の匿名が決まり、発表されたのは、年齢と性別だけだった。

今回、匿名に至ったのは、遺族から警察へ、匿名報道への強い要望があったからだという。

息子が施設にいた家族会の大月和真会長は、当時を「ご遺族の中から、その当日に出てきた話なんですけれども、自分たちの生活を守りたいという一心のことではなかったのかなというように思います」と振り返った。

入倉園長も、「匿名が決まったのは、夜中だったと思うんですけれども、車の中でラジオからそういうニュースが流れて、わたし自身は、ほっとしました」と話した。

一方、家族会の中には、匿名報道に反対の人もいた。

事件当初から、実名で取材を受けている尾野剛志さん、チキ子さん夫妻。

息子の一矢さんは、首や腹部を刺され、重傷を負った。

チキさんは、「(事件後)一矢に会った時は、一矢は真ん丸い目して、目の玉が飛び出るほど、お父さんを見つめて、お父さん、お父さん...」と話し、剛志さんは、「もう感動したっていうか、うれしくて、彼をぐっと抱きしめて」と話した。

実名を公表した尾野さん夫妻。

その理由は、胸を張って生きてきたのだから、何も隠す必要はないという、強い思いからだだった。

剛志さんは、「(匿名だと)津久井やまゆり園にいたことにならなくなってしまう。要するに名前がないわけですからね」と話した。

尾野さんは、息子を匿名にした時点で、存在自体も否定してしまうのではないかと感じたという。

剛志さんは、「親族なんかは、逆に電話かかってきて、『大変だったね、頑張ったね』って言って励ましてくれる。みんな周りの人たちが、励ましてくれるんですよ」と話した。

そして尾野さんには、匿名に踏み切った警察の判断に、拭いきれない疑問があるとい。

当時、警察は「障害者の支援施設であり、ご遺族のプライバシー保護の必要性が極めて高いと判断した。遺族からも、報道対応に特段の配慮をしてほしいとの強い要望があった」と発表した。

剛志さんは、「障害者に鑑みて、障害者だから匿名を許可するというね、僕は、警察が誤った判断したんだろうと思いますね。障害者だから名前出さないっていうことは、もうそこで警察がね、障害者として差別しているわけですよ」と語った。

家族だから感じた「差別された」という意識。

一方で、匿名にしたい人たちの気持ちも理解できるという。

剛志さんは、『匿名やめた方がいいんだよ』ということ、あえて僕は言えないんですよ、同じ仲間だったし、やっぱり家族ですから」と語った。

家族会の大月和真会長は、「(匿名報道が)それがいいか悪いかという問題ではなくて、やむにやまれぬ、ご遺族の対応ではなかったのかなというように思います」と語った。

表現と報道の自由を研究する専門家は、匿名報道の問題点を指摘する。

上智大学・田島泰彦教授は、「匿名の扱いにすると、その人がどういう人なのかということが、明確な形で伝わらないということですよ。それが1つと、全部匿名にすると、取材もできない可能性も出てくると」と語った。

匿名か、実名か。

津久井やまゆり園の事件は、1年たって今も、大きな問いを残している。

＜上尾男性放置死＞殺された気持ち…死亡男性の父「事実曲げないで」

埼玉新聞 2017年7月20日

上尾市戸崎の障害者施設「コスモス・アース」で知的障害がある利用者男性（19）が車内に放置され熱中症とみられる症状で死亡した事故で、男性の父親が20日、埼玉新聞の取材に応じ「一番の思いは息子を殺されたという気持ちだ」と心境を語った。

父親によると、施設側は自宅に謝罪に来ているというが「まだ顔を見て話す気分にはなれず、何も話していない」と明かした。

県は亡くなった男性が重い障害があり、朝に睡眠薬を服用し送迎車内で寝ていることも多かった、と報道陣に発表していた。父親は「睡眠薬は息子が落ち着いて寝られるように、夜寝る前に服用していたことはあるが、朝に飲ませたということはない。事実が曲げられて伝えられたことが悲しく、憤りを感じている。ちゃんと事実を伝えたい」と話した。

男性は朝、いつものように施設に行き、笑顔で帰ってくるはずだった。父親は「びっくりしてしまって、まだきちんとはお話しできる状況ではなく、どうしたらいいかわからない」と言葉を詰まらせた。

施設や県などによると、男性は13日午前9時ごろ、送迎車で事業所に到着後、炎天下の中で6時間以上、車内に取り残された。昼食事に男性の不在に一人の職員が気付いたものの、情報は共有されず、5回の出欠確認の機会は生かされなかった。

＜上尾男性放置死＞ひとつとでない…施設の1日に密着 人手不足の今

埼玉新聞 2017年7月20日

上尾市戸崎の障害者支援施設「コスモス・アース」で知的障害を持つ男性利用者（19）が車内に放置され熱中症とみられる症状で死亡した事故で、同様の施設からは「ひとつとではない」との声が聞こえてくる。普段どのように利用者の安全を守っているのか。さいたま市内の知的障害者施設の1日に密着した。

午前8時40分ごろ、利用者を乗せた送迎車4台が続々と施設に到着。車から自分で降りて施設内に走って向かったり、自力では降車できなかつたりと、利用者の姿はさまざまだ。

全体を見回す職員がいる一方で、重度の利用者を施設内まで誘導する職員がいた。付き添いの職員は、送迎車が到着するごとに走って迎える。30代の支援統括責任者男性は「職員がその日に来る利用者を把握することが何よりも大切。点呼する時間を決めると、逆に頼り切ってしまう怖さがあるので、常に一人一人が確認を心掛けている」と話す。

この日、施設に来た利用者は49人。送迎車は4ルートに分かれており、運転手がルートごとに利用者を把握する。運転手は利用者全員が降車するまで車から離れなかった。車内の運行記録に加え、施設内の送迎記録に利用者一覧表があり、ダブルチェックできる仕組みだ。

全員の降車が済むと、朝礼が始まる。職員が出欠を取り、一人一人とハイタッチして確認。作業場のホワイトボードには、利用者の作業内容と担当の職員の名を記し、施設内で共有できるように工夫されていた。

より重度な障害者が利用する生活介護では、19人の利用者に対し、この日の職員は5人。担当者は「配置基準で職員7人は必要だが、急な欠勤が重なると途端に人手不足。マンツーマンで手厚く見る余裕はない」と話す。

知的障害者の行動特性はそれぞれ。歩き回ったりパニックを起こしたりする利用者がいるため、職員は限られた人数で常に目配せしながら対応していた。

帰宅時間になると、職員全員が利用者とともに外に出て一人一人に声を掛け、送迎車を最後まで見送っていた。

19歳の男性利用者が亡くなるという結果を招いた上尾市の事故。30代男性は「施設の責任だけで終わらせては何も改善されず、現場は重い課題を突き付けられている。まだ

まだ知的障害者施設は地域に敬遠される傾向で、もっと地域で見守れる体制になれば、施設もより良くなっていくと思う」と語った。

柳家花緑「発達障害」の過去告白「お陰で今の自分」 日刊スポーツ 2017年7月21日
著書「花緑の幸せ入門」を手にした柳家花緑（撮影・林尚之）

落語家柳家花緑（45）が、子供の頃は「発達障害」だったことを著書「花緑の幸せ入門」（竹書房、8月4日発売）で初告白する。人間国宝5代目柳家小さんの孫で、22歳で真打ち昇進したが、漢字の読み書きが苦手な通知表も1か2。教室ではじっとしてられず、いつもしゃべっていたという。このほど日刊スポーツの取材に応じ「おしゃべりのおかげで、落語家としての今がある。この障害に感謝しています」と話した。



花緑は小、中学生の頃を「落ちこぼれでした」と振り返る。小1で授業についていけず、テストでは0点を取った。宿題をやらず忘れ物も多かった。「漢字の読み書きも苦手な通知表も音楽と美術以外は1か2。教室でもじっとせず、しゃべってばかりだったので、先生に往復ビンタされたこともあった。学校で身の置きどころがなく、行くのが嫌だった」。

自分が発達障害と知るのは、13年のテレビ出演がきっかけだった。「1」が並ぶ中学3年の通知表を公開したところ、視聴者から「息子も花緑さんと同じ障害です」とメールが届いた。「その時は自分が発達障害とっていなかったけど、よく聞いてみると、同じだった。初めて言われた時はショックだったけれど、今は知ってよかったと思う」。

初めてちゃんと本を読んだのは、二つ目になった18歳の時だった。落語は本ではなく、師匠からの口伝やテープで覚えたので、今では持ちネタは190ほどある。「おしゃべりのおかげで今の自分がある。この障害だったことを感謝しています。ただ、空気が読めず、自分の話ばかりすることもあるので、行き過ぎないようにしています」。

過去の著書は聞き書きが多かったが、今回は自分で書いた。障害告白だけでなく、スピリチュアル（精神世界）にはまったことや、「笑う門に福来る」のことわざから幸せのあり方にも深く踏み入っている。「軽やかに笑っていくことが大事、一緒に幸せを考えていこうという本です。障害やスピリチュアルまで、自分のすべてを正直に書いた。でも、そうしないと前に進めないと思った」と話した。【林尚之】

◆柳家花緑（やなぎや・かろく）1971年（昭46）8月2日、東京生まれ。祖父は5代目柳家小さんで、9歳から落語を始め、中学卒業後の87年に祖父のもとに入門。94年、戦後最年少の22歳で真打ちにスピード昇進した。俳優としても舞台やドラマに出演。10月27、28日に落語会「花緑ごのみ」を東京・霞が関のイイノホールで開催。「堪忍袋」「柳田格之進」ほか1席を予定。

◆発達障害 脳機能の発達が関係する先天的な障害の総称。成長過程で発見されることが多く、学習障害、注意欠陥・多動性障害、自閉症障害、アスペルガー症候群などがある。花緑の場合は学習障害の中でも、知的発達に遅れはないが、教育段階に見合わない読み書きに困難がある識字障害（ディスレクシア）という。

子どもの点滴に排泄物混入… 保護者から虐待、院内でも 朝日新聞 2017年7月21日

保護者による入院中の子どもへの虐待は、全国各地の病院で起きている。小児科医らによる今回の調査では、その一端が明らかになった。

身体的な虐待では、感染症で入院した子どもに対し「激しく怒鳴っている、布団を覆せ

て殴っている」と同室の子の親から相談があった▽肋骨（ろっこつ）を複数骨折していたが、母が面会した後、新たな骨折が判明、といった事例があった。

保護者が、子どもをわざと病気にして献身的に看護し、周囲の注目を集めようとする「代理ミュンヒハウゼン症候群」のケースも多い。子どもの点滴に排泄物（はいせつぶつ）や異物を混入する、などだ。また、輸血拒否など適切な治療をさせない「医療ネグレクト」もあった。

調査チームの一人で、国保旭中央病院（千葉県旭市）小児科の仙田昌義医師は「入院中の虐待は予想以上に多かった。対策を考えるため、その後の経過や、児童相談所、警察がどう関わったかなどをさらに詳しく調べたい」と話す。

「刑務所や地獄」…独少年合唱団の虐待被害者 読売新聞 2017年07月20日

【ベルリン＝井口馨】世界的に有名なドイツの少年合唱団「レーゲンスブルク大聖堂少年聖歌隊」で、1945年から92年までに、少なくとも547人が暴力や性的虐待を受けていたことが明らかになった。

事案を調査していた弁護士の報告書が公表された。

独DPA通信などによると、聖職者や教員が暴力をふるっていたとみられ、調査に対し、被害者は「刑務所や地獄、強制収容所のようなだった」と証言した。被害者には補償金が支払われる。

南部レーゲンスブルクを拠点に1000年以上の歴史がある合唱団は、長年、前ローマ法王ベネディクト16世の兄、ゲオルク・ラツィンガー氏に率いられてきた。報告書は、性的暴行を知らなかったと主張するラツィンガー氏が実態から「目をそらしていた」と非難し、指導者としての責任を指摘した。

「生活困窮者が流入」生活保護の審査強化へ 大阪市、受給目的なのか調査

産経新聞 2017年7月20日

会見する大阪市の吉村洋文市長＝20日、大阪市役所

大阪市の吉村洋文市長は20日、市が管理する生活保護受給者のデータに関し、「生活困窮者が他地域から流入している」との分析結果が出たことを受け、受給認定の審査を強化する方針を明らかにした。

市への転入直後に生活保護を受給した人を調査し、受給目的と判断された人が多かった場合、福祉局に熟練職員によるチームを設置して審査する。吉村市長は「大阪市の審査が緩いということがあってはならない。一生懸命働き、税を納めている市民は納得しない」と述べた。

受給が必要な人の排除につながる懸念に対しては「ノウハウのある職員に担当してもらうことで、より適正な審査、支援ができる。本当に支援を必要とする人は受けられるようにする」とした。

市と大阪市立大は7日、生活保護受給者のデータを共同で分析した結果を発表。平成27年度に住民登録日から受給開始日までの期間が6カ月未満と短かったケースが、男性の19.8%、女性の10.6%に上ることが判明した。

女性のひとり親家庭の受給長期化も明らかになり、吉村市長は「貧困の連鎖を断ち切る就労支援を充実させる」としている

夏休みで「ヒアリ」に注意 環境省がチラシ作成 NHK ニュース 2017年7月21日



強い毒を持つ南米原産の「ヒアリ」が全国各地の港などで相次いで見つかった中、子どもたちが夏休みに入ることから、環境省などはヒアリの特徴や注意点をまとめた子どもや保護者向けのチラシを作成し、注意を呼びかけています。

強い毒を持つ南米原産の「ヒアリ」は、ことし5月以降、神戸港や名古屋港、それに横浜港など全国8か所で見つかっています。

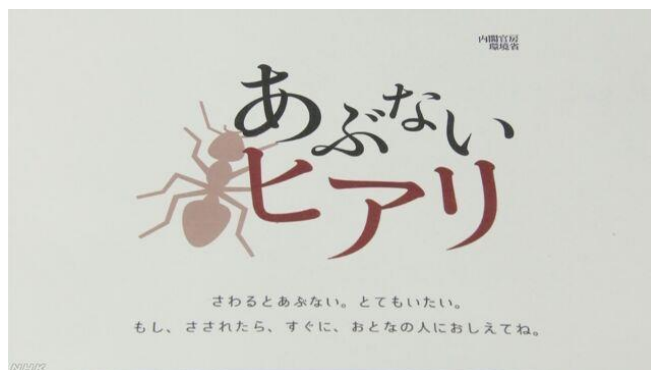
環境省などは夏休みに入り、屋外での活動が増える子どもたちにヒアリに注意してもらおうと、子どもや保護者向けのチラシを作成しました。

チラシには、ひらがなで「触ると危ない」、「刺されたらすぐに大人に教えて」などと記されています。

また、ヒアリの大きさと特徴に加え、大きなアリ塚が目印であると書かれています。そして、大きなアリ塚やヒアリのようなアリを見つけたら、触ったり自分で駆除したりせず、

地方環境事務所か都道府県の環境部局に通報するよう呼びかけています。このチラシは学校などを通じて、子どもや保護者に配られるということです。

環境省は「これまでのところ港など限られた場所で見つからないため、住宅の周辺で繁殖している可能性は低いですが、チラシを参考にして念のため注意してほしい」としています。



<金口木舌>心の壁は

琉球新報 2017年7月21日

「われらは愛と正義を否定する」。1970年代、脳性まひ当事者を中心に、障がい者運動を展開した「青い芝の会」の行動綱領の一文だ▼起草した横田弘さんは、脳性まひのある2歳児が介護に疲れた母親に殺害された事件を巡り、「やむを得ない」と減刑を嘆願する動きに憤った。「加害側」に同情する「正義」、障がい者は殺された方が幸せだという「愛」を告発した▼19人が犠牲になった相模原殺傷事件から26日で1年。被告の殺害予告には「障害者は不幸を作ることしかできない」とある。ネット上で同調する意見もあり、一個人の「狂気」と片付けられない▼事件は当事者の心を深く傷付けた。糸満市の障がい者支援施設で暮らす伊佐重紀さんは「自分たちは『面倒くさい』と思われているのか」と胸を締め付けられたという▼「身の回りのことができずかわいそう」「障がい者とは付き合えない」と言われ、傷ついたこともある。だが「不自由は辛い。でも不幸ではない」。障がい者は自分の一部でしかないことを健常者に知ってもらおうと、交流を続ける▼「青い芝の会」の運動は過激とも言われたが、当たり前の暮らしを求めただけだった。50年近くたち、差別解消に向けての法整備は進んだが、共生社会は実現していない。健常者の「心の壁」を取り払うにはどうすればいいのかが今、問われている。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行